

# 我が国周辺水域資源評価等推進委託事業

## 資源動向調査（八モ）

住友寿明・中西達也

本事業の目的は、我が国周辺水域における主要魚種（TAC対象種、資源管理計画対象魚種等）の資源評価に必要な科学的データの収集と資源動向の的確な把握である。それらの科学的根拠によって資源管理の施策を推進する。このうち、資源動向調査では、資源管理指針対象魚種、広域重要魚種、栽培対象魚種について、漁業と資源の現状、資源回復に関する管理施策、種苗放流による効果等の調査を実施する。徳島県は八モを担当し、操業実態調査と資源動向調査を実施した。

### 方法

#### 操業実態調査

海域毎（紀伊水道、太平洋、播磨灘）における八モの漁獲について、漁獲集計システムを導入している9漁協のデータをまとめた。主要漁法である延縄と小型底びき網については、9漁協のうち代表2漁協の漁獲量をまとめた。

#### 資源動向調査

長期的な資源動向を把握するため、徳島県における昭和31年以降の漁獲量を「漁業・養殖業生産統計年報」から求めた。平成19年以降は「漁業・養殖業生産統計年報」の集計対象から外れたので、代表漁協の漁獲量を引き延ばして徳島県の漁獲量を推定した。漁獲集計システムを導入している9漁協のうち、漁獲物の全量を漁協へ水揚げし、全船がほぼ同時期に同じ漁具を使って八モを狙う代表1漁協のCPUE（kg/日・隻）から資源動向を把握した。

### 結果

#### 操業実態調査

八モの漁獲は紀伊水道、太平洋、播磨灘で見られるが、紀伊水道が主要な漁場である。平成12～27年の漁獲量を海域別で比較すると、漁獲量の88%が紀伊水道、11%が太平洋、1%が播磨灘に位置する漁協で水揚げされている（図1）。紀伊水道における八モの主要な漁法は延縄と小型底びき網であり、代表2漁協で水揚げされる八モの33%が延縄、67%が小型底びき網で漁獲される（図2）。

#### 資源動向調査

徳島県における八モの漁獲量は平成13年に急増した後、横ばい傾向で推移している（図3）。1～12月における延縄

のCPUEは、平成20年以降45～89kg/日・隻で推移し、平成27年は前年比175%の89kg/日・隻だった（図4）。主漁期である4～9月のCPUEは前年を僅かに下回った。1～12月における小型底びき網のCPUEは、平成20年以降32～72kg/日・隻で推移し、平成27年は前年比140%の63kg/日・隻だった（図5）。主漁期である6～10月のCPUEは前年を僅かに下回った。

### 考察

#### 資源状態

タチウオの漁獲量と主漁期のCPUEを指標として、資源水準および資源動向を推定した。平成12年以降の漁獲量から判断すると、資源水準は中位である。延縄および底びき網のCPUEは、平成24年以降大きな変動がないことから、資源動向は横ばいであると考えられる。

#### 資源管理の方法

八モ資源を持続的に利用するためには、産卵親魚の保護、経済的な価値が高くない小型魚や大型魚の再放流等の取り組みを推進する必要がある。また、八モの資源水準や資源動向を的確に把握するためにも、必要となる資料を積み上げることが必要である。

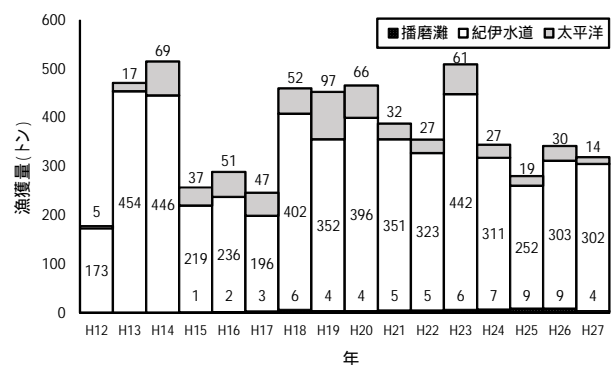


図1. 海域別漁獲量の経年変化

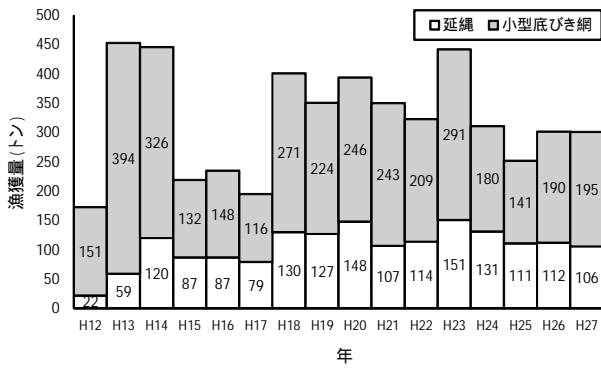


図2. 主要漁法別漁獲量の経年変化

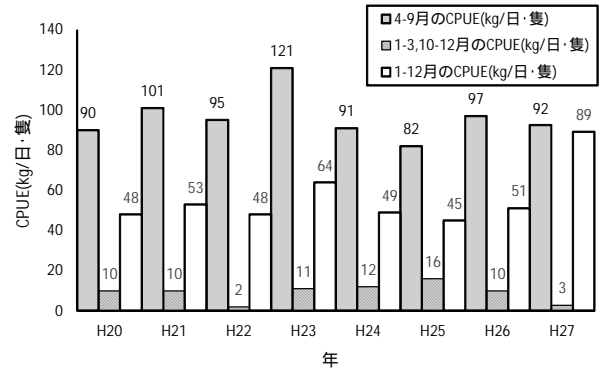


図4. 延縄によるCPUE (kg/日・隻)の経年変化

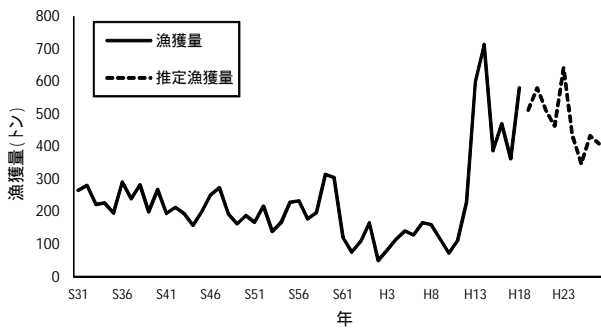


図3. 漁獲量の経年変化  
(漁業・養殖業統計年報 + 推定漁獲量)

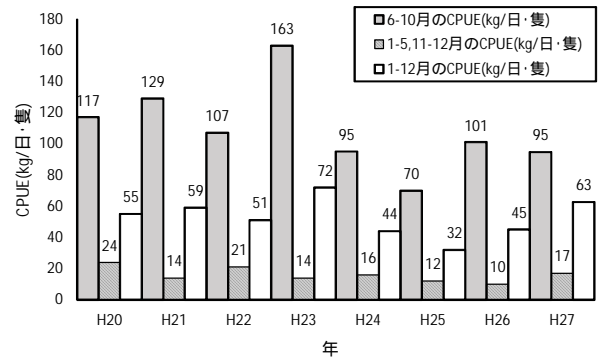


図5. 小型底びき網によるCPUE (kg/日・隻)の経年変化